

平成30年 2月 8日

東松島復興推進員だより(第34号)

JICA 地域復興推進員(東松島)
京野 宏美

平成30年を迎えました。今年は例年と比較して降雪が多く、ここ宮城県東松島市では、海に浮かぶ島々や田畑に雪が降り積もり、美しい風景が広がっています。同時に住民の皆さんにとっては雪かきに追われる毎日でもありました。

今号では、1月22日(月)に東松島市役所内で行われた、市職員によるインドネシア渡航報告会の様子をご紹介します。

「バンダ・アチェ市と東松島市による相互復興：地域防災のためのコミュニティ経済活性化モデル構築事業」にかかる渡航報告について

インドネシア共和国のバンダ・アチェ市と東松島市は、どちらも津波による被災を経験した自治体として2011年5月、スマトラ沖地震・津波からの復興を統括する「アチェ・ニアス復興庁」より東松島市へ視察に訪れた事がきっかけで、交流がスタートしました。

現在、JICAの草の根技術協力事業として「バンダ・アチェ市と東松島市による相互復興：地域防災のためのコミュニティ経済活性化モデル構築事業」が、一般社団法人東松島みらいとし機構（HOPE）により行われています。この事業の目的は、住民主体の活動のうち経済活動に重要なものを拡大し、防災拠点をさらに利活用しつつ、防災におけるコミュニティの主体性を高めて将来の災害に備える仕組みのモデルを構築することです。これまで、東松島市職員や地域住民の方々がバンダ・アチェ市へ派遣されており、同様にバンダ・アチェ市職員や漁師の方々も東松島市を訪れるなど、お互いに学び合いながら復興まちづくりに活かしてきました。

今回、11月29日から12月6日まで、東松島市役所職員のお二人、岡山このみさん（防災課）と葉原正博さん（商工観光課）がバンダ・アチェ市に派遣されました。

まず、岡山さんから防災に関するプログラムとして、共同墓地や震災遺構、大学兼



【岡山このみさん(写真右側)、
葉原正博さん(写真左側)】

津波避難タワー、津波博物館などを訪問したこと、市の地方防災局との意見交換会や「津波遺構自転車ラリー」といったアクティブな取り組みに参加したことが発表されました。

【津波遺構自転車ラリーの様子】



この自転車ラリー、東松島市でこれまで3回行われている「Imoni Walk」（イモニウォーク）というイベントを参考にして実現したそうです。

イモニウォークは、以前バンダ・アチェ市に渡航した東松島市民が、帰国後現地で得た知見をもとに企画・運営してきたスタンプラリー形式のウォーキングイベントです。故郷の魅力を体感し、復旧・復興の様子を発信することを目的として楽しく参加することができ、今年も秋に開催が予定されています。

このように、東松島市とバンダ・アチェ市が互いに学びあいながら復興まちづくりに取り組んでいる様子が報告から伺うことができました。

また、バンダ・アチェ市では、災害の爪痕、遺構を巡る観光が行われ、マレーシアをはじめ他国から多くの観光客が訪れているそうです。岡山さんは「バンダ・アチェ市では、防災イベントや観光業との関連付けを行うことで、防災のハードルを下げ、学びやすい環境を作ることができていました。東松島市でも、徐々に増加していく震災未経験の子供達や転入者への教育に取組み、取り込みやすい状況を作ること、防災に関わる機会を増やしたいです。」と語りました。

次に、商工観光課の葉原さんの発表の様子をお伝えします。

まずはカルチャーショックを受けたことが紹介されました。言葉、お金の支払方、移動手段、食事が日本とは異なることに驚き、自然との関わり方や、平和に関する考え方、文化や宗教の違いといった面も強く心に刻まれたそうです。

今回の渡航での学びを、東松島市での観光において活かす為に、葉原さんは多くの具体事例を挙げていました。イベント広場の集約化、自転車の活用、市民による市内観光、歴史や文化の継承、世界レベルでの交流など、葉原さんの学びは多岐に渡ります。

東日本大震災からもうすぐ7年。「震災を知らない子供たちが増えているので、子供に向けたイベントを通じて東松島市を知ってほしい。市民一人ひとりが誇りと愛着を持って東松島市を自慢することで、大きなイベントに頼らなくてもリピーターは会いに来てくれる。」との言葉で、発表は結ばれました。



【バンダ・アチェ市の防災部長と葉原さん】

お互いの公式ユニフォームを交換。

防災部長は東松島市のユニフォーム、葉原さんはバンダ・アチェ市のユニフォームを着て記念撮影。

最後に、発表後のお二人へのインタビュー内容をご紹介します。

①「異文化に出会った!」と感じたエピソード

岡山さん：「朝5時に響き渡る、礼拝の呼びかけです。事前に知っていたのですが、実際に体験して衝撃でした。」

葉原さん：「英語が通じないことです。今回は通訳さんがいて案内もしてもらえましたが、これがもし一人旅だったらと思うと怖いですね。」

②外の世界を見たことで気が付いた日本や東松島市について

岡山さん：「バンダ・アチェ市と比べると、東松島市は外へ発信する力が弱いかもしれません。アチェの震災遺構を見ると、後世にありのままの震災の怖さを伝えようという姿勢が伝わってきます。東松島市は、目の前の遺すべきものの価値に気が付いていないのではないかと感じました。」

葉原さん：「日本は、祖先や家族の大切さが薄れてしまっているのではないかと感じました。このような人の結びつきの強さが、活気あるまちづくりにも繋がると思います。心に残ったのは『おもてなし』の姿勢の違いです。バンダ・アチェ市の方々からは、食べ物など親切に熱心に勧めて頂きました。イスラム教についても、報道で知りえる事は限られていたのだと分かりましたね。海外の人々の日常について知る機会は、日本では少ないと思います。実際に行ってみて自分で感じる事、会話することが大事だとも感じました。」

③今回の渡航の経験をふまえ、国際協力について思うこと

岡山さん：「災害は世界の様々な場所で種類や規模も違う形で起きています。より広い世界を知り、多くの事を吸収できた素晴らしい機会になりました。特にバンダ・アチェ市という、日本よりも大きな災害の被害にあった場所に行ったことで、東日本大震災とは違った問題を抱えていることや、さらなる復興に取り組んでいる様子を見ることができました。復興途中である点は本市も同じで、お互い励まし合ったような感覚に近いです。実際に現地の方々はとてもフレンドリーで、私たちの家族、まちのことまで案じてくれました。また、バンダ・アチェ市に東松島市を重ねながら見ることで、東松島市とも向きあう良い機会となりました。ぜひ他の職員にも勧めたいと思います。」

葉原さん：「国際協力という意識は全く持たずに飛び込んだというのが正直なところですが、相互復興という観点からお互いに行き来する中で『ビジネス』の接点を見つけることが、観光担当としての国際協力ではと考えます。また海外経験が少ない自分にとって、日本以外の国を知ることが第一歩かと思います。特に東北人の気質として、外部の人に対し引っ込み思案な部分があるので、『おもてなし』に欠かせないことは、まず海外の人に慣れることだと感じています。周りの人へも勧めたいですし、チャンスがあればまた行ってみたいです。」

途上国へ向けた国際協力事業というと、日本からの支援ばかりと思いがちです。しかし実際の派遣を経て帰国したお二人からの報告を聴き、むしろ日本人が学ぶべきことに溢れていると感じました。今回バンダ・アチェ市との交流から持ち帰った気づきや学びを、今後東松島市のより良い復興まちづくりに役立てて下さることと思います。

* 渡航詳細はこちら *

一般社団法人東松島みらいとし機構 (HOPE) Facebookページ
【東松島からバンダアチェへの渡航・現地レポート】

<https://www.facebook.com/hmhope.org/posts/1683283641692839>

【推進員だよりバックナンバー：JICA 東北ホームページ】

<http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html>